



~ 13  
3395  
5



門 13  
3395

三  
榊 鳩 木  
吉

雲 妙間雨夜月卷之五

第十一套

桑の真方逢矢

東都



琴

禰次

延文二年五月四日の朝近仁國愛智川武佐の間雷雨甚しく琵琶湖の水を巻あげたりと云々。鮎鮎るんと活るる雨は雑りて降る。駟ハ昨夜のす小釣もあつた。のハ松葉折焼く。時々ぬ蚊火を燻り。或ハか何そを言く。普門品を讀むのり。小幡の高賈友定物右馬のいある年國司の威徳よりして失ひつる黄牛をさう復し。忽地は憤を洩したるが。今年ハる雨の數おほく養殖しく。塩を草津へ積送り。活業のさるといふ宜かり。ふるふこの日は雷雨。牛小屋の屋棟を吹剥らる。牛ハさる直儒。









子生まじくこれを射く。四方の志あるを示と。その父母これを教  
これを予しを第一茂ととく。夫桑の神木あり。方書その功を稱す  
る最精細。又一種山桑あり。桑に似る。材弓弩の中るとり入りの  
是なり。又蓬の禦乱の草とく。正字通等の説  
弓矢を節物とく。今日毎家。菖蒲を菖。蓬を挿ゆ。その功は  
菖蒲ハ蛇毒を解く功あり。三種の草木。百邪を征す。友よ  
家ハ素と蓬の弓矢をのく。某玉に代るの之と。發示は太吉ふく感  
嘆。膝のさむをさむ。母の細くを同人とく。おし。小幡乃  
物右赤。祈まうとく。怪。法師を。縛る  
を。五三人の奴隷に担擔。村長とく。これを縁頼の下。川とく。皆  
ついで。さうとく。その朝驟雨。雷公とく。鳴る。物右赤が

牛小屋のふたがかり。物右赤が妻の聾とく。その餘或ハ昏倒。或ハ失  
傷。のありとく。幸は命恙。ふるふ。奴隷。猛  
く。矢庭は落る。雷公を敲伏せ。遂は縛る。ゆい。か。か。實の雷  
公。西。往。西。往。法師と名告。物右赤が家の黄牛を杜騙。そ  
る。悪僧。怪。死。と。その落る。と。膳を打。酔  
る。向。の。應。と。引。祈。と  
と。果。太。太。母の仇。と。袴。の。社。あ。け  
飛。か。と。形。勢。を。詮。通。尻。目。は。か。これ。を。止。め。端。ち。う  
立。出。つ。雷。神。を。さん。か。う。ん。物。右。赤。の。ホ。は。り。や。う。あ。の。霹。靂  
と。ゆ。小。墜。る。ハ。理。外。の。奇。談。あり。う。る。別。又。故。あ。べ。と。ん。と。ん  
か。ゆ。あ。と。往。は。黄。牛。を。奪。ひ。去。る。悪。僧。と。ん。是。非。を。論。ず

及ぶ。さうみ放しぐら癖者あり。さうみ遊しそこのいゆ。  
 俄頃雑兵五七人をひびくりやう。光僧昏絶さとしども。驚き醒  
 るん。背をひらき打つええとけ。雑兵ホラうをひらき一人来ひを  
 握り固め。中と声ひらき。礮と打バ。雷神因う。眼を睜。見驚れ  
 且呆れ。あひ惑へる気色あり。が。ふむありて。そのこれと。バ  
 ろどろくわの縛るるぞこのい。そのと。詮通膝立る。刀を突立  
 つ。雷神を信とあり。さうみやう。汝小幡する。物を取つが牛小  
 屋又墜る。縛らるるをさうみ。以のれくる。汝いぬる。年物右  
 虎つを欺さる。黄牛を奪去り。瀬田の二郎次郎といふ。の又賣  
 ぶ。彼を連累せり。憐れ。二郎次郎ハ。妻を喪ひ。子も別と  
 刺底倉あり。汝も撞見。直は怒り。人さう。恨く。嫂を切害し。

さら。罪の脱まが。をさう。領主は。死を賜ひ。年ふる。い  
 する。少年ハ。彼二郎次郎が。見子あり。太以吉と。呼る。の。只音又母の  
 仇を復さんと。さう。日夜寢食を安う。せ。その孝を。天は通。神  
 明を憐れ。居ま。その仇人。は。是併。汝が。牛を盗む。の。悪報  
 ぬ。び。物を取つ。生拘らる。天綱ハ。遂に。備。さう。首状  
 せ。よ。の。太以吉ハ。怒気。面。の。刀の。鞘を。握り。結。雷神を  
 ぶ。み。あり。共。天を。戴。の。誓。直。果。ど。バ。れ。ど。  
 今。を。下。さ。る。の。剛。司。の。仰。を。す。さ。う。其。の。光。僧。兩。田。西。後  
 陣。号。雷神。と。呼。る。の。と。名。告。天。珠。は。伏。を。罵。々。雷神  
 れ。を。笑。冷。笑。小。童。が。仇。人。呼。う。さ。う。ど。は。さ。う。の。名。告  
 くと。せん。い。ぬ。秋。神。崎。の。狂。女。蓮。葉。は。練。寺。は。守。り。



をねむ。ふぞり故郷に立ち入りし。小幡の商人を欺た。牛を奪ひ去  
 る。これを詭張に換強食を奪く。ゆきゆき箱根の海へ。その老  
 白雲黒雲の會し。底倉の里人を奸策す。や各寺に住持せり。さ  
 もはが又は怒らむ。そのさ度覺す。彼地を脱去。昨夕鏡山の麓  
 を過ると。雷獸の柄を夜をあつし。これ小幡と。愛智川小幡の  
 何と。朝雨を降ると。與に乘り。不覺に雲を踏射し。誤る  
 物ちあつが。們は捕らる。と。いふ。これ國司を由屑とせむ。況て黄  
 口孩兒。竹とると。さふ退り。と。飽す。小幡言。つと身を起  
 せ。雜兵ども。凶と。聞くと。足を起し。撲地と。蹴倒し。繞て  
 ちるをふり。拂ひ。唱る咒文。奇なる。縛の索あつ。放非  
 と。離る。さ。アと。海へ。詮通大は怪。そ。と。擲ると。焦

燥め。雜兵亦。苦を揚。打。ふ。え。と。群。さ。ら。ん。が。ん。ふ。あ。い。で  
 象。搦。倒。し。ふ。破。く。と。倒。る。雷。神。ハ。さ。も。と。と。冷。笑。ひ。袖。う。う  
 拂。去。ら。ん。と。さ。る。を。物。右。村。長。ハ。奴。隸。と。も。よ。立。ふ。さ。ら。ん。  
 脱。し。後。日。の。裁。度。と。さ。ふ。を。共。力。あ。り。遮。り。笛。ん。と。さ。れ  
 ば。り。ろ。と。も。ふ。撞。と。轉。覆。る。動。さ。る。と。詮。通。焦。燥。と。長。押。る。  
 薙。刀。の。鞘。を。外。し。暮。直。に。の。け。ん。と。さ。る。を。の。け。り。や。と。牙。を  
 及。り。う。ん。潛。り。跳。越。也。その。疾。と。電。光。の。閃。く。と。又。陽。炎。の。沖。ふ  
 似。たり。太。次。吉。を。え。ん。と。大。に。怒。り。縁。の。柱。を。さ。り。し。菜。の。葉  
 蓬。の。矢。を。刺。し。り。川。渡。え。ん。と。さ。れ。ば。雷。神。が。ゆ。ら。び。唱。る。咒。文。と。も  
 一。采。の。叢。雲。忽。然。と。天。降。る。彼。光。僧。を。一。累。霹。靂。一。声。天。地  
 を。動。し。と。走。る。電。ハ。碎。る。人。の。眼。を。遮。り。雲。井。遙。に。雷。神。が





をえり。かゝる深山の住む人のあり。ともうごち。その煙を目當に。  
 サ一山を下まれば賊とみせし悪僧。只二人さう向ひぬ。木の枝  
 と折焼つ。一壺の酒を燦るまであり。それの二の悪僧へ  
 音をひびく。雷神をえり。さういふて。吾儕からあつて。て  
 来ぬひつ。寔にえり。さう再會あり。その悪僧ホハ別入の  
 白雲黒雲より。雷神もふり。さうさう。さうさう。さうさう。さうさう。  
 汝ホハ又の比。さうさう。さうさう。さうさう。さうさう。さうさう。  
 脱まるといふ。師又の往方とさう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。  
 甘んじ。終に音耗るまで。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。  
 と。よ。東海道との心。昨日の山。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。  
 と。正に。一壺の酒。師又を引く。別後の情を述べて。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。

まぐ三盃を酌め。といひぬ。ぬ。雷神酒の壺。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。  
 さう。白雲黒雲。大。驚。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。  
 さう。飲。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。  
 神。我。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。  
 術。を。傳。授。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。  
 水。脈。を。函。泉。を。個。ら。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。  
 と。の。り。酒。を。近。つ。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。  
 び。女。も。慎。酒。を。飲。そ。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。  
 示。さう。物。右。左。つ。が。為。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。  
 の。索。を。脱。詮。通。が。薙。刀。を。屑。と。せ。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。さう。  
 又。い。や。彼。二。席。次。席。武。章。と。中。ん。が。児。子。今。観。音。寺。の。城。中。

山田詮通が家よりく。これを親の仇と罵る。這奴亦悉極敵  
とん。とどひつるふ彼武草が兒子太吉と申ん。が漳桑のちを  
りく。立ちひくべ。されと歌。ごて。その矢前を脱。ら。み。抱。其。つ  
て。そ。う。り。む。も。汝。亦。よ。あ。へ。り。所。詮。這。奴。亦。を。世。よ。め。せ。く。い。後。安。う。ら。ん。  
ま。が。樹。を。り。く。城。中。の。水。壇。を。御。給。國。司。氏。頼。を。そ。め。め。ら。く。城。中  
の。奴。原。を。饑。渴。よ。苦。め。け。し。の。恨。を。消。さ。さ。し。汝。亦。ん。や。里。よ。い。さ。て  
志。の。び。身。小。調。伏。の。祭。器。と。買。り。く。味。も。と。そ。の。意。を。巧。く。懐。く。う  
金。三。枚。雨。より。そ。う。出。し。て。投。と。ま。べ。白。雲。黒。雲。一。殘。り。も。及。び。ど。あ。ら。う  
か。と。應。つ。金。を。受。と。り。て。二。人。り。う。と。も。ふ。ま。り。去。り。次。の。日。よ。至  
る。准。備。全。く。整。ひ。一。く。雷。神。ハ。峯。上。の。瀑。布。よ。注。連。川。纏  
り。し。ら。ら。ん。岩。上。よ。坐。と。ら。く。種。々。の。供。物。と。高。机。よ。並。ぶ。

さく。白。雲。黒。雲。を。ひ。く。り。や。う。れ。今。日。よ。う。七。日。か。間。斷。食。し。て。  
法。を。終。し。城。中。の。水。れ。壇。を。堰。留。る。る。れ。が。女。人。ハ。さ。く。之。樵。夫。山。見。よ  
至。る。と。く。近。づ。く。と。る。り。ま。ら。れ。と。ま。え。あ。ら。ざ。れ。ば。二。人。諾。ひ。く。壇。の  
下。よ。番。次。せ。り。む。て。雷。神。ハ。志。む。一。天。地。を。礼。拜。し。口。よ。咒。文。を。唱  
ま。す。酸。醜。く。く。雲。起。り。霧。又。あ。く。立。升。く。忽。地。そ。の。形。狀。と。見。せ。ど。  
只。あ。う。吟。と。と。宝。澤。の。音。の。も。さ。う。く。幽。よ。ひ。え。り。

第十二套 岩戸山の麓の糸

さ。そ。も。妙。太。吉。ハ。仇。人。雷。神。と。打。り。し。て。遺。恨。よ。堪。え。ぬ。彼。既。約。術  
さ。る。く。飛。行。自。在。な。れ。ば。尋。常。の。歌。も。よ。め。只。と。め。え。ん。神。仏  
の。冥。助。を。仰。ぎ。丹。誠。を。凝。ら。し。て。祈。願。し。ま。る。の。外。あ。ら。な。ら。ず。ん。だ  
と。く。同。胞。志。を。あ。ら。し。め。が。城。外。の。観。音。堂。よ。詣。り。大。慈。大。悲

あし  
す  
あし  
あし  
あし



たえ

たえ

あし  
あし  
あし  
あし  
あし

あし  
あし  
あし  
あし  
あし



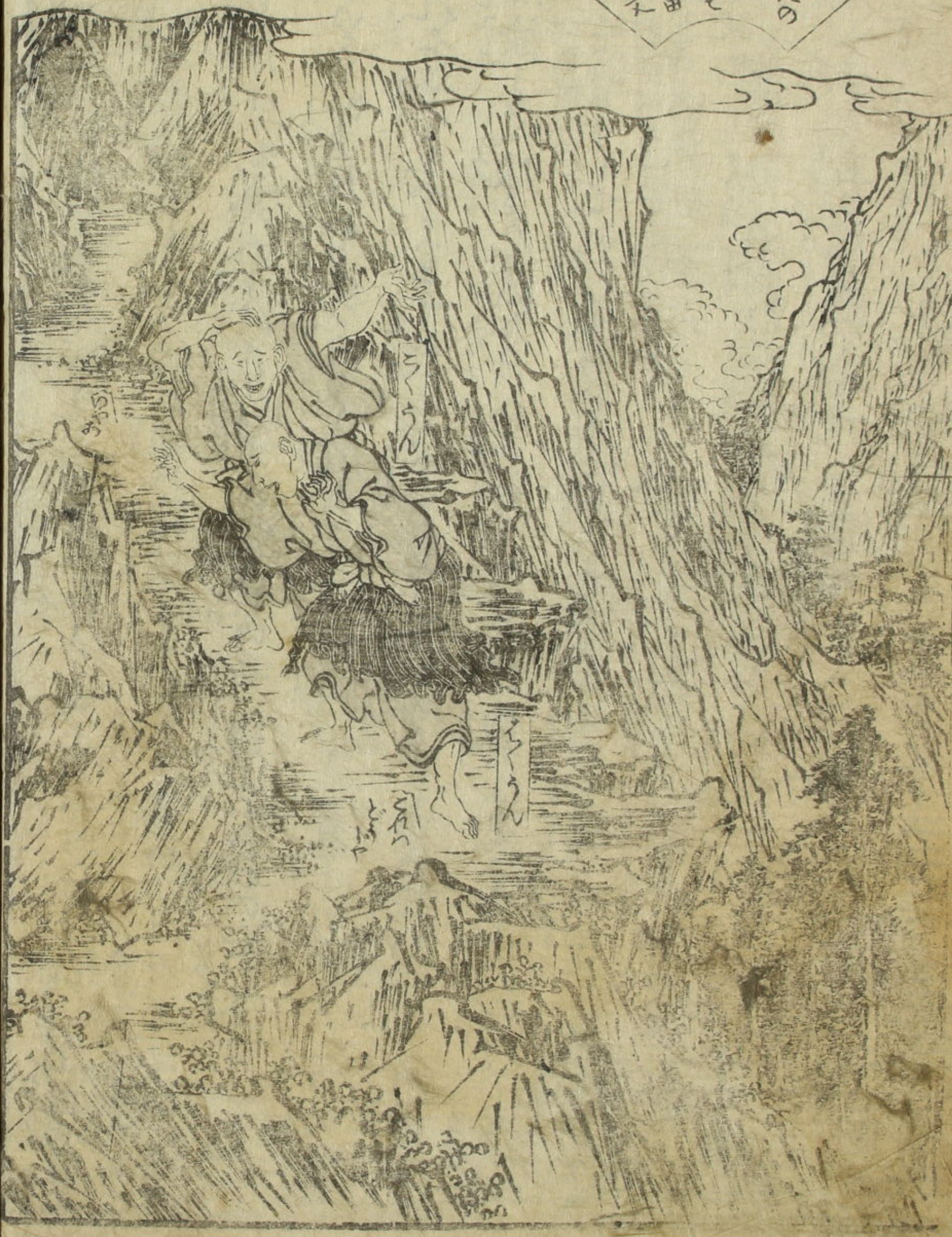








ひと  
の  
香も  
くも  
音も  
梅子  
雷  
羅



三三井

うは高机を居て。次米荒稻甘菜辛菜の和菜とて

つ。滅んとて又明く。唯ふより落る籠の上は注連川纏

魔切の杉相物凄下は形勢あり。そのとて雷神へけつと妙と直

女人何のあつて只もとつる深山は登つたつれ近き大形を發して。七日

齋齋と今日とつるち若邪は當日は女入を忌とりとも甚し。さうくゆゆ

といふ妙のされをゆき。あそ一雷神を瞻望して宿形のおり匠て山勢を

あそといふと雲の妙向とゆれ。愛智川のほとりあり。何くが女見まてあは

里は推より互よむいあつたれる。結髪は夫作りが年の齡日面影も。く師

又よ似て作り。さうふその夫びつるあつ。猛よ改誓と前て家を出より

絶てその往方とあつ。人のりふをゆきあふ。岩戸山よとけ入る。妙いと

そとゆりともいひ。又とつるくあつねともゆえ。定うあつべ。恋慕

愛惜中つるくあつ。あつる像世ますと條の衣の袖へ雲をれや。涙の雨の

絶て降る。さういふがさつ月七日也。照りあつねり。と身を果敢る。は夫

世あつ。がらさつは佛に事て二世の結縁を祈らん。又世あつ。その人の苦

授を吊けつ。んとて。憂よりさつ梓弓。さつも捨ねと誓ひ切捨る。く煩惱

の羈あや。縁つて。閑れより閑れよ入る。惑いを解さつ。あつ。導はあつ

のいふ。潜忍とあつ。面影の雨を帯る。柳の眉露と含る。海棠の花

物いふ。と疑は。雷神とつどち息つた。世よの似。さつ。あつ。あつ。あつ

子早振神。邊の蓮葉が。あつと消する。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ

のいふ。さつ。後佛たり。とさつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ

忌。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ

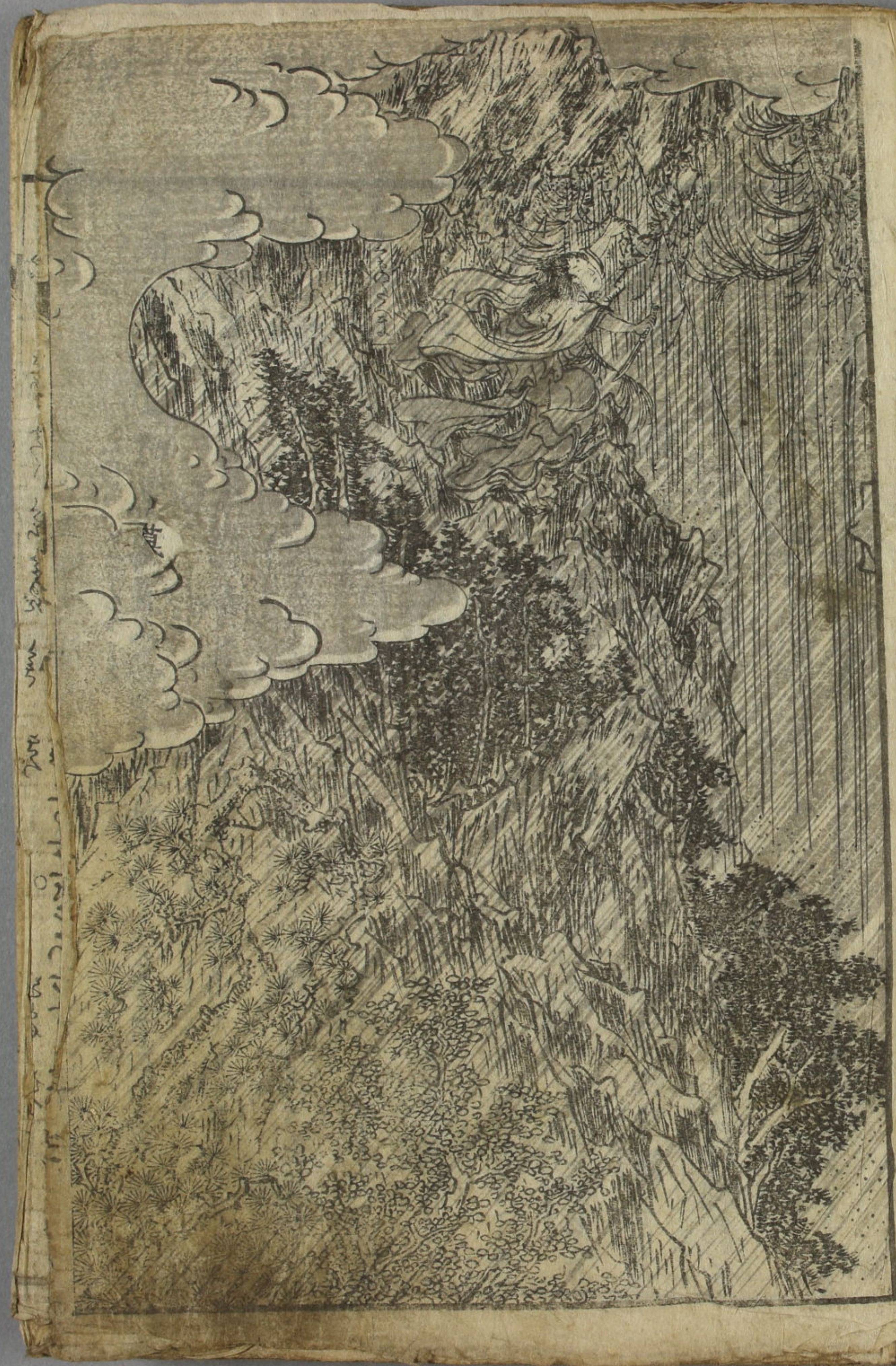
鳴ら。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ。あつ



風は吹あらしる。のま姑と吐たつ。それを忘れられも又憎下と  
 羨まふり揚せぬ。その雅さうら気入る。おどろと急されぬ。榮螺  
 の湖水より。あふらして進んで。いひ紛りにて去り。木あつて  
 目送る。雷神又妙をえりて。じよ雲の妙をこやん。いふ夫の像  
 見ごとて。えせつ。鏡の竹とやんらう憎し。今一たびえせぬ。と  
 振る。いと恨はしと鏡恥。あつとさ。おどろとさ。とちか雷神  
 の空を廻る。竹と叫び。あつて撲地と倒り。妙の効るあつらして。花桶  
 ある。個を数回。雷神がはよ。はた入れ。くどつて。受飲。未酒の。牙の。さ  
 小砕。臥て。遂に。破る。火又の。秘。巖。よ。を。さ。る。火。雷神の。画像。より。火。出  
 る。忽地。發と。燃。う。せ。り。さ。い。な。裸。し。つ。の。向。ふ。と。妙。の。衣。を。引。あ  
 け。張。り。落。る。籠。津。津。と。信。と。え。あ。れ。バ。い。と。い。ま。れ。板。十。丈。ある。

巖の影より。引渡る。住連を。びり。う。う。切捨ん。翹け。や。と。夕。と。え。る。深。山  
 風の吹あらしる。ちりあく。はゆり。う。響。の。声。あ。ら。と。も。一。箇。の。燐。火。西  
 のうらうら。花。も。さ。り。懐。よ。の。と。え。え。り。妙。の。猛。は。身。も。軽。く。籠。の。裏  
 白く。玄。鳥。あ。ら。し。む。儒。を。を。厭。む。裾。踏。む。高。よ。縁。を。こ。内。と。登。り  
 結る。若。鮫。と。え。え。る。見。く。准。防。の。懐。劍。す。く。と。抜。き。住。連。の  
 真。中。丁。と。切。捨。せ。ぬ。天。油。鼓。と。結。陰。降。る。雨。の。浪。の。裾。を。乱。す。よ  
 異。う。ら。ど。電。光。あ。ら。し。て。山。鳴。初。け。ど。動。り。ぬ。孝。を。雄。く。死。女。女。が  
 髪。あ。り。乱。し。ち。ぢ。念。ず。普。門。品。を。れ。や。雲。雷。鼓。擊。電。降。雷。射  
 大雨。觀。音。刀。の。実験。も。ほ。も。え。せ。ぬ。と。祈。清。ら。逆。せ。る。落。る。籠。空  
 の。あ。ら。し。一。閃。り。と。花。び。れ。ば。燐。火。の。妙。が。懐。より。渡。と。妙。出。る。又。花。の  
 函。を。弁。て。花。を。ま。ね。と。も。あ。ら。し。む。取。り。り。る。雷神。の。雨。は。打。起







久旱逢甘雨他御遇  
 故知洞房花燭夜金  
 榜掛名時  
 右宋人咏四喜句

春の  
 あつちや  
 月よ  
 こころ  
 ちか  
 ちか

久旱逢甘雨の御遇  
 故知洞房花燭夜金  
 榜掛名時  
 右宋人咏四喜句

あつちや  
 月よ  
 こころ  
 ちか  
 ちか



るの林

あつちや  
 月よ  
 こころ  
 ちか  
 ちか



あつちや  
 月よ  
 こころ  
 ちか  
 ちか

伊原多次吉

るの林

るの林

山田のり

あつちや  
 月よ  
 こころ  
 ちか  
 ちか



かくて妙を以て言ひ。詮通と云ふ。麓より下りて勇士ホム會し。まづつれづれにて  
 觀音寺の塔よりまづり。國司氏頼は復讐言の存体をばえあじふ。氏頼は復  
 同胞が此度の功績を褒賞ありて。よづつ引出物殿あり。且親世音の  
 利益雲の山が忠魂を稱讃し。新に數間の堂宇を建立てて。彼觀世  
 音を安置し。祈願所よよえはば。此の月件の同胞小詮通  
 とて。副て底倉へ遣し。武章が冥墳を祀ら。あひする程に妙を以て言ひ。國  
 司の恩を拜謝して。詮通は伴走。日を強く相列底倉より到著し。父の  
 墓より訪ふ。寺名寺は殿の施物を寄進し。且木質光補より糸糸と  
 する。仇討のゆゑ告よりれば。光補あり。その純孝を感激して。ま次吉  
 より牙切草のゆを物より。その種を附屬して。養飼のゆを傳授せり。  
 らよ至る。底倉の里人ホム。いづれ雷神が好悪をありて。武章をいと

惜と。その子とも。の孝む比類あるを嘆賞と。ま詮通は。妙を以て言ひを  
 ねる。近は。いづり。日室所殿。彼同胞のゆを。や食むられ。ま次吉の  
 飼のまより。はば。まれ。と。氏頼は。仰て。それを。修。日。の。所。莊園。稻。田  
 所を。あつて。近臣は。加。あ。ま。ま。と。ま。次。吉。の。妙。も。修。へ。付。ひ。て。ま。ま。ま。は  
 武士は。誓。縁。を。結。せん。と。詮。通。と。ま。ま。の。ゆ。を。相。結。り。が。妙。の。兼。引  
 氣。を。あ。つ。仇。人。雷神。が。幻。術。を。破。る。謀。も。あ。れ。ま。ま。牙。切。草。の。ゆ。を。傳。授。せ。り。  
 法衣を著し。今ま。ま。人の。妻。と。あ。る。ん。選。俗。の。尼。に。侍。あ。る。と。ま。ま。  
 長く。象。教。の。か。を。ま。ね。父。母。の。菩。提。を。吊。ん。と。を。願。ひ。れ。と。ま。ま。  
 勸。れ。ま。も。聽。む。遂。に。祝。髮。受。戒。して。妙。雲。尼。と。は。名。と。ま。ま。親。世。音。堂  
 成就。ま。ま。り。氏。頼。が。妙。雲。尼。を。り。て。彼。堂。を。守。る。を。堂。料。と。ま。ま。傳  
 り。ま。ま。の。夜。氏。頼。詮。通。妙。雲。尼。を。以。て。言。ひ。ホ。ム。ま。ま。親。世。音。告。て。ま。ま。

此岩戸山は五色の鹿あり。又その山は雪山といふ。汝門ありて。観音菩薩  
 の大願を發し。日夜普門品を流経し。件の鹿流経の声を聞いて感佩  
 隨喜し。遂に雪山に草庵のほとりてを去らば。ある日。獵夫雨田武平これ  
 をあつて。普門品を讀むあり。日雪山に菴ありてを窺ひ。其処より五六  
 所を隔たる。谷陰に到り。矢を伏して普門品を流し。五色の鹿流経の  
 声より。彼谷陰に未だ武平忽ち射す。その皮を剥ぎ。利洛に推し  
 かれて。其價は倍らんとす。折しも武泰武章が父伊原武俊とあり。其の  
 新田氏光に従ひて京都にあり。武平が鹿皮を賣りて。數十金を得て。是を  
 購ふて。行勝とて秘藏し。其業因是彼に及して。鴉夫武平。其  
 奇病は係りて世を去り。その子雷神法師。毒の鹿の皮を煮て。以て  
 墮落し。且物を賣りて。汝らんとて。畜生を父ありと稱し。又武泰武章夫

婦は横死す。されば。彼五色の鹿は神崎の蓮葉と生れて。雷神が道公を折  
 死。武泰武章は冠し。汝門雪山に。其子生れて。又雪山の山といはれ。武章父子が  
 信義孝行を憐れ。それが乃ち身を殺し。観音寺の奉持仏を土中より  
 掘出さして。堂宇建立の宿願を果し。又小幡の物を賣り。其の比  
 倫ありて。件の鹿の皮を媒し。武俊は買ひて。おのれ。雷神に利をば  
 る。その悪報は。其の物たる。雷神は牛を盗去られ。又武章を  
 寛。その身も。終に雲落すと。是を。因果あり。其の事。前  
 生の悪報。娑婆。妙次吉が巨孝。親の寛を雪る。その事。雷神も又  
 震期は悟道せり。ある日。鏡山の雷獸。雷神法師を痛めて。雨を  
 降さ。幻術を傳授して。袈裟を。其の罪犯する。其の事。是れ  
 近に。其れを罰する。其の事。告めんとす。覺て。後。互に。其れ





作者

曲亭馬琴

画又

廣



藏人 郭倉伊八

俊寛僧都鳴物語

全六冊

醉 齋

系檮赤繩奇編

全五冊

梅川忠孝漢大和紀好

全六冊

お孫久松 昔物語

あまの草市

全五冊

長右衛門 全傳

桂花秋波暗録

全五冊

浮世猪と秋曉傘

全三冊

右曲亭子來載彩著編の題目今字所を以録之 琴壚

柏榮堂藏版目次

かきやん

驛路春鈴菜物語

節亭琴壚子著 曲亭主人補綴

前編二冊

國字名名のり

芍藥亭主人著述

全五冊

勸善常世物語

全五冊

周遊奇談

全五冊

三國妖婦全傳

全十五冊

鈴菜物語後編

近刻

神田通鍋町 和泉屋平 吉

江戸 小傳馬町三丁目 和泉屋幸右衛門

神田鍛冶町二丁目 嶋長四郎

文化五年戊辰三月吉日發販



書肆 湯嶋切通町 柏 屋清兵衛

下谷 御成小路 柏 屋忠七

神田通鍋町 柏 屋半藏

子...  
依...

山...  
...  
...

...  
...  
...

入...  
...  
...



